進む「航空公園」整備

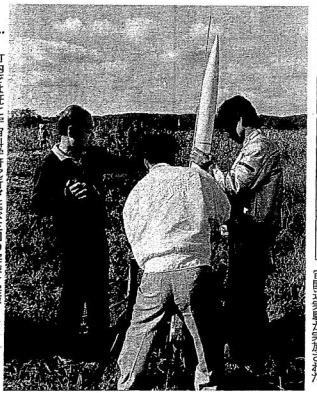
滑走路、秋にも供用開始

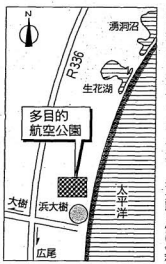
宇宙実験で活用　スカイスポーツにも

大樹

航空宇宙産業基地構想を推進する大樹町。取り組みは早くも八年目に突入したが、今年は町が宇宙関連として初めて手がけた施設「多目的航空公園」が、滑走路を含めて一部完成する。広大な面積を有した同公園は、愛好者が増えつつあるスカイスポーツや宇宙関係の実験などでの活用を目指している。滑走路の規模は全長一㌔と大きなものではないが、二十一世紀をにらんだ壮大な夢を宇宙につなぐ"懸け橋"に一つ期待が膨らみそうだ。

町内では既に宇宙科学研究所が延べ三回の実験を実施
（写真は昨年十月の小型ロケット発射実験）





▽▽▽

来年度には付帯施設建設

公園が造成されているのは、大樹市街から北側に約十五㌔入った美成地区。計画では、この一帯約三十七㌶の敷地内に全長一㌔、幅六十㍍の滑走路を設ける。工事に着手したのは昨年九月で、既に滑走路用地の伐採、整地はほぼ完了。春を待って最終的な滑走路面の整備などを行う。また、六年度には管理棟や駐車場などの付帯施設も建設する予定で、滑走路自体は今秋の供用開始を目指している。

同町内には八年前、ウルトライトプレーンなどの愛好者が「大樹スカイスポーツクラブ」を結成した。しかし、恒常的に使用できる施設のない現状では、牧草地や農道を滑走路代わりに使用するしかなく、なかなか自由に飛ぶことができなかった。同クラブの福田和雄会長は「レクリエーションが多様化している今の時代、金銭的にみてもスカイスポーツ人口は確実に増えている。大樹町にも滑走路を含めた航空公園が整備されることは、愛好者としてうれしいこと。仲間を増やすことにもプラスになるのではないか」と期待を込める。

▽▽▽

総合的なレクゾーンに利用

スカイスポーツを核とした総合的なレクリエーションゾーンとしての利用へ並行して、町が大きな期待を寄せているのが、宇宙開発にからんだ実験場としての活用だ。

活発に基地誘致活動展開

同町では既に、二回の宇宙関連実験が実施された。いずれも実施主体は文部省宇宙科学研究所で、パラグライダー状のパラシュートを落下させる「グライディング・パラシュート」や小型ロケットを使用した「超音速パラシュート」など主にロケットなどの減速装置に関する基礎実験が行われ、成果を収めている。

▽▽▽

解決すべき問題が山積み

日本の宇宙開発は、国内の最高技術を結集したロケット「H2」の打ち上げを目前に控え、いよいよ国産技術で宇宙に飛び出そうとしている段階。同型ロケットらず、十勝全体が今後の取り派生型には日本版スペースシャトル・HOPESが搭載され、二十一世紀初頭には初飛行、本格的な宇宙開発時代が到来する計画。しかし、地球と宇宙を往復するためには解決すべき問題も山積しており、それ以前に地球上でこなさなければならない実験は数多い。

▽▽▽

十勝全体が取り組み注目

大樹の持つ広大さが、こうした実験を行ううえで大きなメリットになることは、これまでに同町を訪れた数多くの研究者や宇宙開発指導者が指摘、町も活発な誘致活動を展開している。宇宙のマチに名乗りを上げて以来、初めて取り組む本格的なハード施策が、大樹と宇宙の距離を縮めるステップになるのか。町民のみならず、十勝全体が今後の取り組みに注目している。

海に面した位置に造成されている多目的航空公園滑走路